

Lab News

テーマ

XE-2100 スキャッタグラム的好中球領域の変化を用いた効率的な敗血症診断

血算測定装置は血球計測だけでなく、スキャッタグラムでその分布を確認することができます。今回、血算測定装置 XE2100 のスキャッタグラムパターン(図 1)と好中球空胞変性(図 2, 3)から敗血症例を効率的に見出す方法を考案しました。図 1 の水色部分は、好中球領域ですが SIRS 症例は正常に比べ、幅が広がり、上方に向かって“立つ”所見が特徴であり、空胞変性も多く認められました。当院の血液検査室では好中球領域の面積の増大や空胞は病態を反映しており、敗血症をスクリーニングする上で重要な所見と考えて、必要に応じてコメント報告しております。

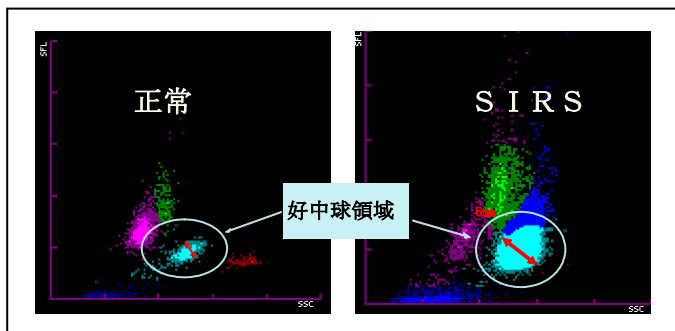


図 1 : XE2100 スキャッタグラムパターン

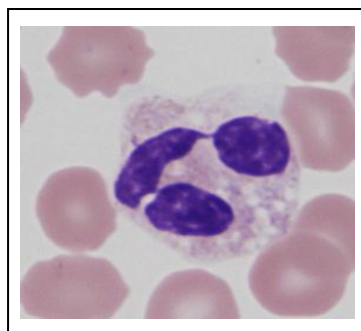


図 2 : 好中球空胞変性

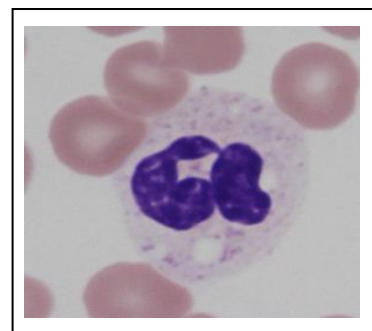


図 3 : 巨大空胞変性

図 4 は、当院検査部で開発運用している検査システム CLASSY の時系列画面です。右側から経日的に眺めてみると水色部分の面積が増大し、“立つ”所見がみられることが判ります。

この症例では、血液培養より *Escherichia coli* および *Enterococcus faecalis* が検出されました。

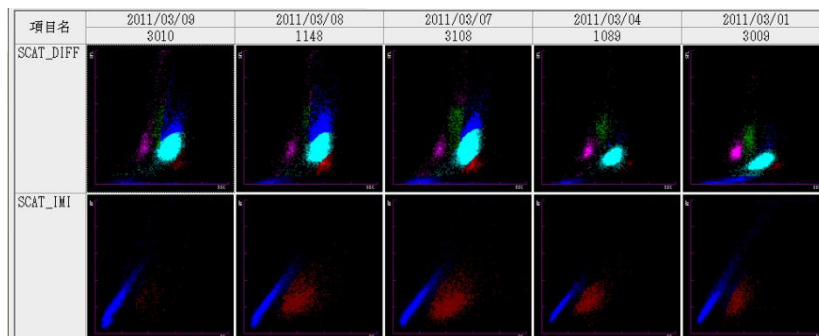


図 4 : XE2100 スキャッタグラム時系列

【まとめ】

SIRS 症例では好中球領域の面積が増大し、“立つ”所見がみられる。

SIRS 症例では空胞変性が多く認められた。

好中球領域の変化と空胞変性は、効率的に敗血症を見出す為の運用上有用と考えられた。